

原著

名寄市立総合病院皮膚科における 皮膚悪性腫瘍の統計的観察

眞鍋 公 山内 利浩

はじめに

皮膚悪性腫瘍の統計の報告は多い。しかし、それらは主として大学付属病院からの報告であり、市中病院からの報告は意外に少ない^{1) 2)}。今回われわれは市中の総合病院である本院約6年半の皮膚悪性腫瘍を集計し、統計的に観察し、若干の考察を加えて報告する。

対象と方法

1992年10月から1999年3月までの6年6カ月間に名寄市立総合病院皮膚科を受診した患者のうち、病理組織学的に検討し皮膚悪性腫瘍と診断されたものを対象とした。それらは表皮系（日光角化症、Bowen病、基底細胞上皮腫、有棘細胞癌、ケラトアカントーマ）、メラノサイト系（悪性黒色腫）、Paget病、間葉系（隆起性皮膚線維肉腫、悪性線維性組織球腫）、網内系悪性腫瘍（悪性リンパ腫）、および癌皮膚転移と診断されたもの

Key Words : 皮膚悪性腫瘍, 表皮系腫瘍, 間葉系腫瘍, 癌皮膚転移, 統計的観察

A statistical study of cutaneous malignant tumors at Nayoro City Hospital since 1992 through 1999

Akira Manabe, Toshihiro Yamauchi

Department of Dermatology,
Nayoro City Hospital

名寄市立総合病院 皮膚科

である。なお、海外では癌皮膚転移の統計には悪性黒色腫や悪性リンパ腫、白血病の皮膚転移を統計に含める場合³⁾もあるが、日本における統計は内臓の固形腫瘍の皮膚転移の集計であることが多い⁴⁾。ゆえにわれわれの統計もそれに準じ、悪性黒色腫、有棘細胞癌の皮膚から皮膚への転移や、間葉系腫瘍の皮膚への転移は除外した。また、ケラトアカントーマは病理組織学的に有棘細胞癌に類似の悪性像を示すが、一般に自然消滅する良性の腫瘍と考えられている。しかし、国内外で有棘細胞癌への移行を示した症例もあり^{5) 6)}、当科でも基本的に経過観察とはせず積極的に切除しており、今回、表皮系悪性腫瘍に含めた。また、同一患者のうち2種類以上の皮膚悪性腫瘍を合併しているものは、それぞれの病名で1例とした。

結 果

皮膚悪性腫瘍患者は合計95名で、6年6カ月間の外来新患総数17975名に対する頻度は0.53%であった。図1に示したように大きく分けると、表皮系悪性腫瘍77例(84.1%)、メラノサイト系悪性腫瘍4例(4.2%)、Paget病1例(1.1%)、間葉系悪性腫瘍3例(3.2%)、網内系悪性腫瘍1例(1.1%)および癌皮膚転移は5例(5.3%)であった。

表皮系悪性腫瘍の内訳は、日光角化症が27例(29.7%)で最も多く、次いで基底細胞上皮腫24例(26.4%)、有棘細胞癌17例(18.7%)、Bowen病9例(9.9%)、ケラトアカントーマ4例(4.2%)であった。間葉系悪性腫瘍の内訳は、悪性線維性組織球腫2例(2.1%)、隆起性皮膚線維肉腫1例(1.1%)であった。網内系悪性腫瘍は1例(1.1%)で皮膚T細胞リンパ腫であった。癌皮膚転移は5例

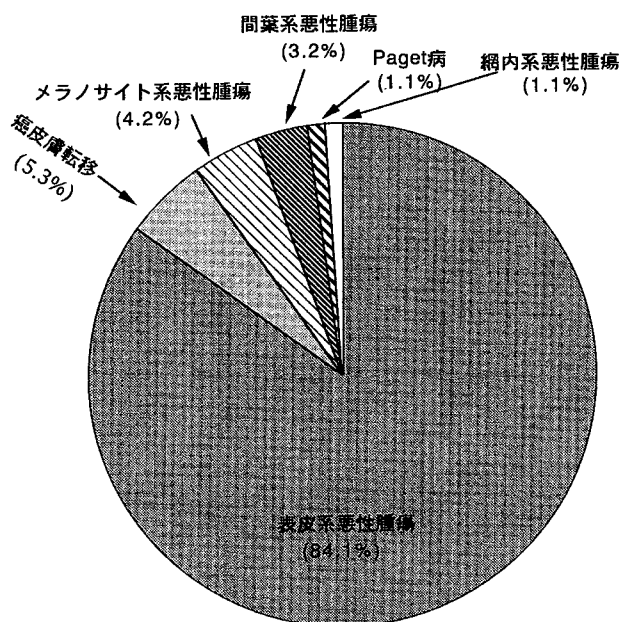


図 1 皮膚悪性腫瘍 (95 例) の内訳

(5.3%) であった。

1. 有棘細胞癌

(1) 年度別、年齢別、性別患者数 (表 1、2)

症例総数は 17 例で、性別では、男：女＝1：1.8 と女性に多い傾向がみられた。最低年齢は 57 歳女性、最高年齢は 92 歳の男女であり平均年齢は 78.9 歳 (男性 76.3 歳、女性 80.3 歳) で 80 歳代にピークを認めた。

(2) 発症から初診までの期間 (表 3)

期間が 10 年以下の症例は 13 例 (76.5%) で、平均は 2 年 1 カ月であった。最短は 1 カ月、最長

は 10 年であった。発症後 1 年未満に受診したものは 5 例 (29.4%) であった。

(3) 発症部位 (表 4)

顔面に発症したものが最も多く 13 例 (76.5%) を占め、他に上肢が 3 例 (17.6%)、下肢が 1 例 (5.9%) であった。なお、多発例はなかった。

(4) 前駆病変又は発生母地

17 例のうち前駆病変又は発生母地の明らかなものは 5 例 (29.4%) でその内訳は日光角化症 4 例、熱傷瘢痕 1 例であった。

表 1 皮膚悪性腫瘍の年度別症例数

| | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 計 |
|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 有棘細胞癌 | 0 | 1 | 1 | 3 | 5 | 5 | 1 | 1 | 17 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (1,0) | (1,0) | (0,3) | (1,4) | (3,2) | (0,1) | (0,1) | (6,11) |
| 基底細胞上皮腫 | 1 | 4 | 5 | 1 | 5 | 2 | 6 | 0 | 24 |
| (男性例, 女性例) | (1,0) | (1,3) | (1,4) | (0,1) | (3,2) | (1,1) | (6,0) | (0,0) | (13,11) |
| 日光角化症 | 4 | 2 | 1 | 4 | 7 | 5 | 3 | 1 | 27 |
| (男性例, 女性例) | (0,4) | (2,0) | (1,0) | (1,3) | (2,5) | (2,3) | (1,2) | (0,1) | (9,18) |
| Bowen病 | 0 | 0 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 9 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (1,2) | (2,0) | (0,1) | (0,1) | (0,1) | (1,0) | (4,5) |
| ケラトアkantoma | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| (男性例, 女性例) | (1,0) | (0,2) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,1) | (0,0) | (1,3) |
| 悪性黒色腫 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| (男性例, 女性例) | (0,1) | (0,0) | (1,1) | (0,0) | (0,0) | (0,1) | (0,0) | (0,0) | (1,3) |

表2 皮膚悪性腫瘍の年度別症例数

| | ～9 | ～19 | ～29 | ～39 | ～49 | ～59 | ～69 | ～79 | ～89 | 90～ | 計 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 有棘細胞癌 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 4 | 6 | 3 | 17 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,1) | (2,1) | (2,2) | (1,5) | (1,2) | (6,11) |
| 基底細胞上皮腫 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 4 | 8 | 5 | 0 | 24 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,1) | (1,0) | (3,0) | (0,1) | (0,1) | (1,3) | (3,5) | (3,2) | (0,0) | (11,13) |
| 日光角化症 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 10 | 11 | 2 | 27 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,1) | (1,2) | (4,6) | (4,7) | (0,2) | (9,18) |
| Bowen病 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 4 | 2 | 9 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (1,0) | (0,0) | (1,1) | (1,3) | (1,1) | (4,5) |
| ケラトアカントーマ | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,0) | (0,3) | (0,0) | (0,0) | (1,0) | (0,0) | (0,0) | (1,3) |
| 悪性黒色腫 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| (男性例, 女性例) | (0,0) | (0,0) | (1,0) | (0,0) | (0,1) | (0,0) | (0,1) | (0,0) | (0,1) | (0,0) | (1,3) |

表3 発症から初診までの期間

| | 1年未満 | 1～2 | 2～3 | 3～4 | 4～5 | 5～10 | 10年以上 | 不明 | 計 |
|-----------|------|-----|-----|-----|-----|------|-------|----|----|
| 有棘細胞癌 | 5 | 4 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 3 | 17 |
| 基底細胞上皮腫 | 3 | 4 | 6 | 1 | 3 | 2 | 1 | 4 | 24 |
| 日光角化症 | 10 | 4 | 4 | 4 | 0 | 2 | 2 | 0 | 26 |
| Bowen病 | 3 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 9 |
| ケラトアカントーマ | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 悪性黒色腫 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 4 |

表4 発症部位

| | 頭部 | 顔面 | 頸部 | 上肢 | 体幹 | 外陰 | 下肢 | 計 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 有棘細胞癌 | 0 | 13 | 0 | 3 | 0 | 0 | 1 | 17 |
| 基底細胞上皮腫 | 0 | 18 | 2 | 0 | 4 | 0 | 0 | 24 |
| 日光角化症 | 0 | 27 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 27 |
| Bowen病 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 5 | 9 |
| ケラトアカントーマ | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 悪性黒色腫 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 4 |

表5 TMN分類

| | 有棘細胞癌 | 基底細胞上皮腫 |
|--------|-------|---------|
| T1NoMo | 13 | 21 |
| T2NoMo | 3 | 2 |
| T3NoMo | 0 | 0 |
| T4NoMo | 1 | 1 |
| 計 | 17 | 24 |

表6 診断正確率

| | 診断正確率 |
|-----------|-------|
| 有棘細胞癌 | 52.7% |
| 基底細胞上皮腫 | 45.8% |
| 日光角化症 | 81.5% |
| Bowen病 | 77.8% |
| ケラトアカントーマ | 50.0% |

(5) TNM分類 (表5)

T1 (<径2cm) が13例 (76.5%) を占めた。他に T2 (径2cm以上5cm以下) が3例、T4 (他臓器への浸潤) が1例であった。N (リンパ節)、M (遠隔転移) はいずれも0であった。

(6) 初診時診断 (表6)

初診時有棘細胞癌と診断されたのは9例で、診断正確率は52.7%であった。他の初診時診断は、ケラトアカントーマ2例、基底細胞上皮腫2例、脂漏性角化症2例、日光角化症1例、感染性粉瘤1例であった。

(7) 治療

17 例中 4 例（下口唇発症 3 例、下肢の熱傷瘢痕 1 例）は当科で生検後、形成外科に紹介した。残り 13 例で外科的手術を行った。単純切縫術が 9 例、全層植皮術が 3 例、皮弁形成術が 1 例であった。

2. 基底細胞上皮腫

(1) 年度別、年齢別、性別患者数（表 1、2）

症例総数は 24 例で、性別では、男：女＝1：0.8 とやや男性に多い傾向がみられた。最低年齢は 13 歳女児、最高年齢は 86 歳の女性であり、60 歳代から 80 歳代に多かった。

(2) 発症から初診までの期間（表 3）

期間が 10 年以下の症例は 20 例（83.3%）で、平均は 3 年 10 カ月であった。最短は 1 カ月、最長は 16 年であった。発症後 1 年未満に受診したものは 3 例（12.5%）であった。

(3) 発症部位（表 4）

顔面に発症したものが最も多く 18 例（75.0%）を占め、他に頸部 2 例、体幹 4 例であった。顔面で Merkel の顔裂線（胎生期顔裂線）と一致したものは、下眼瞼 5 例、鼻側頬部 2 例であった。また、鼻部は顔裂線に沿う部位ではないが 6 例と顔面の 33.3% を占め、好発部位となっている。

(4) TNM 分類（表 5）

T1 が 21 例（87.5%）を占めた。他に T2 が 2 例、T4（他臓器への浸潤）が 1 例であった。N（リンパ節）、M（遠隔転移）はいずれも 0 であった。

(5) 初診時診断（表 6）

初診時基底細胞上皮腫と診断されたのは 11 例で、診断正確率は 45.8% であった。

(6) 治療

24 例中 1 例（鼻尖部発症後、右眼瞼および右頬部にかけて浸潤した 74 歳男性）は当科で生検後、形成外科に紹介した。残り 23 例で外科的手術を行った。単純切縫術が 16 例、全層あるいは分層植皮術が 5 例、皮弁形成術が 2 例であった。

3. 日光角化症

(1) 年度別、年齢別、性別患者数（表 1、2）

症例総数は 27 例で、性別では、男：女＝1：2 と女性に多い傾向がみられた。最低年齢は 58 歳女性、最高年齢は 93 歳の女性であり、平均年齢は 78.3 歳（男性 78.2 歳、女性 78.4 歳）で 70 歳

代から 80 歳代に多かった。

(2) 発症から初診までの期間（表 3）

期間が 10 年以下の症例は 24 例（92.3%）で、平均は 2 年 2 カ月であった。最短は 1 週間、最長は 10 年であった。発症後 1 年未満に受診したものは 10 例（38.5%）であった。

(3) 発症部位（表 4）

27 例全例が日光裸露部である顔面に発症した。多発例は 1 例であった。

(4) 初診時診断（表 6）

初診時日光角化症と診断されたのは 22 例で、診断正確率は 81.5% であった。他の初診時診断は、脂漏性角化症 3 例、基底細胞上皮腫 1 例、有棘細胞癌 1 例であった。

(5) 治療

27 例中 1 例（下口唇発症、77 歳男性）は当科で生検後、形成外科に紹介した。残り 26 例で外科的手術を行った。単純切縫術が 16 例、全層植皮術が 3 例、皮弁形成術が 6 例であった。1 例（右頬部発症、93 歳女性）はプレオマイシン軟膏の外用を行った。

4. Bowen 病

(1) 年度別、年齢別、性別患者数（表 1、2）

症例総数は 9 例で、性別では、男：女＝1：1.3 であった。最低年齢は 52 歳男性、最高年齢は 97 歳の男性であり、平均年齢は 81.6 歳（男性 76.8 歳、女性 85.4 歳）で 80 歳代に多かった。

(2) 発症から初診までの期間（表 3）

期間が 10 年以下の症例は 8 例（88.9%）で、平均は 3 年 11 カ月であった。最短は 3 カ月、最長は 20 年であった。発症後 1 年未満に受診したものは 3 例（33.3%）であった。

(3) 発症部位（表 4）

下肢に発症したものが最も多く 5 例（55.6%）を占め、他に体幹が 2 例、顔面、上肢が各々 1 例であった。なお、多発例はなかった。

(4) 初診時診断（表 6）

初診時 Bowen 病と診断されたのは 7 例で、診断正確率は 77.8% であった。他の初診時診断は、有棘細胞癌 1 例、脂漏性角化症 1 例であった。

(5) 治療

9 例中 8 例で外科的手術を行った。単純切縫術が 5 例、全層あるいは分層植皮術が 3 例であった。

1例（背部発症、82歳男性）はブレオマイシン軟膏の外用を行った。

5. ケラトアkantトーマ

(1) 年度別、年齢別、性別患者数（表1、2）

症例総数は4例で、性別では、男：女＝1：3であった。最低年齢は42歳女性、最高年齢は79歳の男性であり、平均年齢は52.8歳で40歳代に多かった。

(2) 発症から初診までの期間（表3）

全例が期間が1年未満に受診した。平均は24.5日で、最短は4日、最長は2カ月あった。

(3) 発症部位（表4）

全例が顔面に発症した。顔面のなかでは、頬部2例、鼻部1例、前額部1例であった。

(4) 初診時診断（表6）

初診時ケラトアkantトーマと診断されたのは2例で、診断正確率は50%であった。他の初診時診断は、日光角化症1例、尋常性疣贅1例であった。

(5) 治療

全例で外科的手術を行った。単純切縫術が3例（1例は液体窒素療法4回施行後、単純切縫術施行）。局所皮弁形成術が1例であった。

6. 悪性黒色腫

(1) 年度別、年齢別、性別患者数（表1、2）

症例総数は4例で、性別では、男：女＝1：3であった。最低年齢は25歳男性、最高年齢は83歳の女性であった。

(2) 発症から初診までの期間（表3）

1年未満に受診したものは1例のみで、10年前に発症したものが2例あった。

(3) 発症部位・病型分類（表4）

体幹に発症したものが3例で病型としてはsuperficial spreading melanoma (SSM) であった。足趾に発症した1例はacral lentiginous melanoma (ALM) であった。

(4) 病期分類

stage Iが3例、stage IIが1例であった。

(5) 治療および予後

4例中3例は旭川医大皮膚科において広範囲切除およびDAV療法（DTIC、ACNU、VCR）を行った。うち、2例は生存中である。残り1例（ALM）は家族が手術を拒否したため、経過観察していたところ、腫瘍が増大し1997年3月当科再来、姑息的に切除施行したが10月永眠された。

Paget病、隆起性皮膚線維肉腫、悪性線維性組織球腫、悪性リンパ腫および癌皮膚転移に関しては表7、8にまとめた。

表7 Paget病・間葉系悪性腫瘍・網内系悪性腫瘍の症例

| 症例 | 病名 | 初診年月日 | 初診までの期間 | 部位 | 治療 | 転帰 |
|-----|---------|------------|---------|------|--------------------|-----|
| 71F | Paget病 | 1997/4/30 | 2カ月 | 左乳房 | 左大小胸筋温存乳房切除術 | 生存 |
| 29M | DFSP* | 1998/5/11 | 25年 | 下腹部 | 拡大切除（取り残しあり、計3回施行） | 生存 |
| 73F | MFH** | 1997/5/9 | 3週 | 右鼠径部 | 拡大切除+全層植皮術 | 他病死 |
| 17M | MFH | 1997/11/18 | 1年 | 左大腿 | 皮弁形成術 | 生存 |
| 59M | CTCL*** | 1998/10/14 | 2カ月 | 顔面 | 化学療法(CHOP+Bleo) | 生存 |

*DFSP:隆起性皮膚線維肉腫

**MFH:悪性線維性組織球腫

***CTCL:皮膚T細胞リンパ腫

表8 癌皮膚転移の症例

| 症例 | 原発巣 | 転移部位 | 初診年月日 | 臨床像 | 組織像 | 原発巣発見から皮膚転移まで | 皮膚転移から死亡まで |
|--------|-----|------|------------|-----|------|---------------|------------|
| 1. 78M | 肺 | 左臀部 | 1996/11/15 | 結節 | 大細胞癌 | 3カ月 | 2カ月 |
| 2. 97M | ? | 顔面 | 1996/11/29 | 結節 | ? | ? | 4カ月 |
| 3. 61M | 肺 | 右腋窩 | 1998/9/7 | 炎症 | 腺癌 | 3年 | 7カ月（生存中） |
| 4. 69M | 肺 | 頭部 | 1998/11/19 | 結節 | 腺癌 | 3カ月 | 6カ月（生存中） |
| 5. 68M | 肺 | 左1趾 | 1999/1/5 | 結節 | 腺癌 | 9カ月 | 4カ月（生存中） |

考 察

1992年10月から1999年3月までの6年6カ月間に名寄市立総合病院皮膚科を受診した皮膚悪性腫瘍患者は95名で、外来新患総数に対する頻度は0.53%であった。従来から皮膚悪性腫瘍の頻度は一般病院では低く、大学病院では高い傾向が報告されており、その頻度は大学病院で0.49～0.85%^{7) 8)}、一般病院では0.15%^{1) 2)}であり、一般病院と比べると比較的高かった。観察期間を前期と後期にわけた場合、増加傾向にあったのは、有棘細胞癌、日光角化症、基底細胞上皮腫であった。皮膚悪性腫瘍の増加の原因として、オゾン層の破壊により短波長紫外線の地上への到達の増加が強調されている⁹⁾。事実、当科でも日光暴露と深い関係がある皮膚悪性腫瘍の増加が明らかであった。

発症から初診までの期間を検討すると、基底細胞上皮腫、悪性黒色腫で1年未満の受診が少ない傾向が認められた。

悪性黒色腫や悪性リンパ腫は、化学療法が必要なため、当科では関連の大学病院に紹介している点は致し方ないが、有棘細胞癌で4例、基底細胞上皮腫で1例を形成外科に紹介した。特に有棘細胞癌の3例では下口唇に病変があり、煩雑な皮弁形成術が必要であった。今後も下口唇の病変は、想像以上に広範囲に亘っていることがあり、部位的に注意が必要であることを改めて痛感した。

癌皮膚転移に関しては、原発巣としては従来、胃癌や乳癌が多いとする報告が多かったが、最近では肺癌が最も多いとの報告が相次いでいる^{4) 10)}。また、臨床像は結節型が多いと言われているが、自験例においても原発巣が不明であった1例を除いた全例で肺癌であり、5例中4例が結節型であった。転移巣の組織像では、腺癌が5例中3例を占めた。福井ら¹¹⁾の報告でも肺癌7例中5例で転移巣に腺癌の組織像をみている。ただし、自験例では症例数も少なく、肺癌、特に腺癌が転移しやすいとの結論は現時点では控えたい。

診断正確率では、有棘細胞癌52.7%、基底細胞上皮腫45.8%と比較的低い値であった。特に基底細胞上皮腫は前回の報告¹²⁾と比べ、6.8%も診断正確率が低下したことは遺憾であり、今後一層の診断力の向上が必要と再認識させられた。

文 献

- 1) 宮本秀明, 大勝美保, 斎藤すみ, ほか: 平塚共済病院皮膚科における最近10年間(1980～89)の皮膚腫瘍の臨床統計. 皮膚臨床 33: 543 - 549, 1991.
- 2) 松本録一, 初道 誠: 富山市民病院皮膚科における皮膚悪性腫瘍. 皮膚臨床 34: 1847 - 1850, 1992.
- 3) Lookingbill DP, Spangler N, Helm KF: Cutaneous metastases in patients with metastatic carcinoma: a retrospective study of 4020 patients. J Am Acad Dermatol 29: 228 - 236, 1993.
- 4) 藤岡 彰, 高須 博, 武村俊之, ほか: 過去25年間の北里大学皮膚科における転移性皮膚癌48症例の検討. 西日皮膚 60: 681 - 683, 1998.
- 5) Sullivan JJ, Colditz GA: Keratoacanthoma in a subtropical climate. Aust J Dermatol 20: 34 - 42, 1979.
- 6) 秋山真志, 和泉達也, 海老原 全, ほか: ケラトアカントーマから扁平上皮癌に移行した2症例の検討. 臨皮 46: 1087 - 1093, 1992.
- 7) 菊池 新, 清水 宏, 原田敬之, ほか: 慶大皮膚科における過去22年間の皮膚悪性腫瘍の統計. 日皮会誌 103: 1743 - 1746, 1993.
- 8) 上田英一郎, 岸本三郎, 安野洋一: 京都府立医科大学皮膚科における最近10年間の皮膚悪性腫瘍の統計的観察. 臨皮 50: 961 - 966, 1996.
- 9) 濱田 学, 中山樹一郎, 竹下弘道, ほか: 紫外線と皮膚悪性腫瘍発症との関連性に関する統計学的検討. 西日皮膚 56: 1028 - 1034, 1994.
- 10) 堀 真, 山城一純, 烏山 史, ほか: 転移性皮膚癌の統計的観察. 西日皮膚 49: 304 - 310, 1987.
- 11) 福井佳子, 徐 信夫, 前島精治, ほか: 転移性皮膚癌32症例の統計的観察. 皮膚 37: 534 - 543, 1995.
- 12) 眞鍋 公, 柏木孝之: Bowen病を思わせた表在型基底細胞上皮腫の1例および名寄市立総合病院皮膚科における基底細胞上皮腫の統計的観察. 名寄市病誌 6: 40 - 45, 1998.